

うめ はらりゅうざぶろう
梅原龍三郎《モレー》

どんな音が聞こえてきそうですか?

ふきだしのなかに、書き込んでみましょう。

(例: レーン、そよそよ、びゅーびゅーなど)



その音が
どうして浮かんだのか、
理由を考えてみましょう。

この作品の季節は
いつでしょう?
また、どうしてそう
思ったのですか?

自分がこの作品のなかに
入り込めたら、どこで
どんなことをしたいですか?

くわしく知りたい!

梅原龍三郎《モレー》について。



梅原龍三郎《モレー》

1911年、油彩・画布、60.5×73.7cm

鑑賞のポイント

深緑の葉が生い茂った樹木、真っ青な空、その空が映りこんだ水辺、太陽に照らし出された赤い屋根の家々。たくさんの色が使われていますが、落ち着いた色調で統一されているため、穏やかな風景となっています。作者の梅原龍三郎は、フランスのパリで絵を学んでいました。フランス滞在中は、ヨーロッパのいろいろな国芸術や歴史的建造物、遺跡を見てまわり、絵を描くこと以外に、たくさんのことを見たそうです。

梅原龍三郎は、一八八八年に京都市に生まれました。家が悉皆屋という着物をあつかうお店だったため、幼いころから着物の図案や染色、刺繍などを見て育ち、色やかたちに対するすぐれた感覚を自然と身につけてきました。十五歳で絵の勉強をはじめ、浅井忠という画家に習います。芸術の都パリで絵を学ぶために、フランス語の勉強もしました。一九〇八年に田中臺作とともにフランスに留学し、翌年、尊敬するルノワールを訪ねると、ルノワールは梅原龍三郎の才能を認め、優しく迎え入れてくれました。一九一三年に帰国し、周囲の期待を受けながらも、なかなか日本の風景を描くことができませんでした。しかし、悩んでいた後、ヨーロッパ生まれの油絵を用いないながら、日本らしい表現をする「日本的油絵」を描き、評価されました。

「写生にあらわれる作者の視線」

ワサワサと生い茂る樹木の葉、さらさらと流れる水の音が聞こえそうな水辺、じりじりとした日差しに照らし出される家々の壁や屋根…というように、ひとつの風景のなかにも、いろいろな音や感触が見えてきます。筆の動きであったり、使われた色などからあなたが感じたことを考えてみましょう。作品をじっくり観ることで、いろいろな発見をすることができます。そして、ちょっとした発見が、絵をよりおもしろく見せてくれるものです。青くぬられた空や、暑い日差しを感じさせる光の表現などから、この作品は夏に描かれたのかな?と想像できたでしょうか。絵からその場所の温度やにおいが感じられたら、それは、あなたが作者に一步近づけたということかもしれません。

作品について

そんなある時、スペインを旅行中に、作家は風邪をこじらせてします。パリに戻り、病院にかかると、医者からしばらくゆっくりするようすめられました。そこで、休養をとるためにおとずれたのが、パリの郊外にあるモレーという村でした。休養をとるように言われたのに、絵を描くことがやめられなかったのでしょうか。目の前に広がる風景がとてもていねいに描かれています。

作家について

梅原龍三郎は、一八八八年に京

都府に生まれました。家が悉皆屋と

いう着物をあつかうお店だったた

め、幼いころから着物の図案や染

色、刺繍などを見て育ち、色やかた

ちに対するすぐれた感覚を自然と

身につけてきました。十五歳で絵

の勉強をはじめ、浅井忠という画家

に習います。芸術の都パリで絵を学

ぶために、フランス語の勉強もしま

した。一九〇八年に田中臺作とともに

フランスに留学し、翌年、尊敬す

るルノワールを訪ねると、ルノワ

ーは梅原龍三郎の才能を認め、優し

く迎え入れてくれました。一九一三

年に帰国し、周囲の期待を受けなが

とができませんでした。しかし、悩んで

いた後、ヨーロッパ生まれの油絵を用いないながら、日本らしい表現をする「日本的油絵」を描き、評価さ

よろずてつ ご ろう とう
萬鐵五郎《ガス灯》



生活を快適にする便利なものが、
世の中にたくさん登場した時代に
描かれた作品です。

画面の真ん中で立っているのが
ガス灯です。

現在のような街路灯が使用さ
れる前は、石炭ガスを燃料としたガス
灯が、暗い夜道をほのかに照らして
いました。

ガス灯以外にも
描かれているものがあります。

○で囲んだ部分には、
なにが描かれていると
思いますか？

1

2

3

この作品から
感じることは?
右の言葉から
選んでみましょう。
(○で囲んでください)

明るい

暗い

こわい

さわがしい

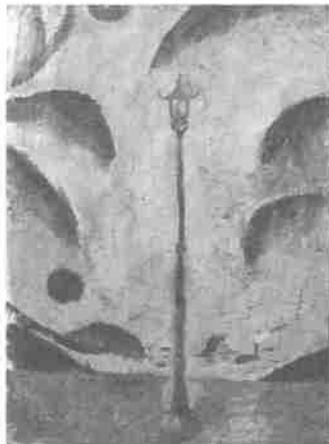
楽しい

さびしい

その他

くわしく知りたい!

よろづてつごろう 萬鐵五郎《ガス灯》について。



萬鐵五郎《ガス灯》

1913年、油彩・画布、33.4×24.3cm

鑑賞のポイント

「新しい表現、個性の探求」

画面の左右と上部に、深緑色の不思議ななかたちをしたものが描かれていますが、実は、この作品が描かれたのと同じ頃の作品に、同じようななかたちを見るることができます。それは、葉っぱをたくさんつけた木の枝です(図1)。また、下の方には寺や煙突らしいものが描かれていますが、これも同じように、煙突を描いた作品が残っています(図2)。

もしかするとこれらの木の枝や煙突は、作者の心に深く印象に残ったものだったのかもしれません。萬鐵五郎は、常に新しい表現方法

を探し続けた画家でした。

作者が、物のかたちや風景

を見たままに描くのでは

なく、自分なりの解釈を加え

て、絵を描いていったこと

がうかがえる作品です。



図1 『冬の人物』1913年頃
萬鐵五郎記念美術館蔵

図2 『風景(煙突のある風景)』
1912年 個人蔵

作品について

明治時代になると、生活を快適にする便利なものが、ヨーロッパから次々と輸入されるようになりました。そのなかでもガス灯は、外国の雰囲気をまとった、新しい時代の訪れを象徴する存在だったようです。イタリアのピサを舞台とした演劇のポスターにも同じ構図の絵を描いたそうですが、ヨーロッパの近代都市の象徴として、作家はガス灯を選んだのかもしれません。

現在の電灯と異なり、ガス灯のあかりはそれほど明るくはありませんでした。そのせいか、このガス灯が辺りをこうこうと照らしている様子は見られません。むしろ、辺りは暗く、画面左右と上部に深緑色の奇妙ななかたちをした物体が描かれていたり、左側に赤黒い丸い物体が浮かんでいたりするせいで、全体に不思議な印象を受ける作品です。

の表現を確立しました。ローラーだけでなく、日本の伝統絵画にも興味を持ち、独自に先駆けとされています。ヨー

しかし、いまでは、個性を全開にした『裸体美人』は、その大胆な筆づかいと色づかいが、日本の人間の奔放さに、周囲はびっくりしました。

作にゴッホやマティスからの影響を思わせる『裸体美人』を作りました。洋画科予備科に入学し、本格的に絵を学びはじめます。卒業制作に絵を選びました。孝太郎に絵を学びました。一九〇七年には東京美術学校西洋画研究所で長原孝太郎に絵を学びました。大学中学で勉強しながら、白馬会菊坂洋画研究所で長原孝太郎に絵を学びました。一年時代を送りました。一九〇三年に東京に出てくると、早稲田大学で勉強しながら、白馬会菊坂洋画研究所で長原孝太郎に絵を学びました。岩手県の農海産物問屋の長男として生まれ、何不自由ない少

作家について

萬鐵五郎は、一八八五年に

岩手県の農海産物問屋の長男

として生まれ、何不自由ない少

年時代を送りました。一九〇三

年に東京に出てくると、早稲田

大学中学で勉強しながら、白

馬会菊坂洋画研究所で長原

孝太郎に絵を学びました。一

九〇七年には東京美術学校西

洋画科予備科に入学し、本格的

に絵を選びました。卒業制

度にゴッホやマティスからの

影響を思わせる『裸体美人』を

描くと、あまりの奔放さに、周

囲はびっくりしました。

すだくにたろう かわら
須田国太郎《河原》

おお がめん
大きな画面!

ぜんたい み
はなれて全体を見たり、
ちが こま み
近づいて細かいところをよく見てみよう。



がめんした
まる 画面の下のほうの
丸いものや、ゴツゴツした
なん ものは何だろう?



メモ

うえ さゆう
上のほうや左右も
み なに えが
よく見て、何が描かれて
いるか、記録しよう。

いろ どんなんふうに
ぬき 色を塗ったのだろう?

くわしく知りたい!

須田国太郎《河原》について。

鑑賞のポイント



画面の下のほうの、ゴツゴツしたものは何だろう?
よく見ると、形もさまざま。ほかにも、
画面のすみずみまで、いろいろな描き込みがある。
何が描かれているのだろう?近づいて
よく見ると、いろいろな色の絵具が重なっている。
色の塗り方にも注意してみよう。

作品について

幅約1.6メートル、高さ1.3メートルのとても大きな作品です。独立美術協会という美術団体の1939年の展覧会で初めて発表されました。

色が独特で、ベージュに見えるところも実は単純な一つの色ではなく、いろいろな色が混ざり合っているようです。

じつは、須田国太郎は、油絵具のいろいろな使い方を研究していました。いったん塗った

あとに、絵具をこすったり布でふき取ったり、乾かしたあとから削ったり。この作品でも、そういう独特の絵具の表情を見つけてみましょう。

また、光と影の表現も、須田国太郎が興味をもっていたテーマです。

この作品では、影は、どんな色で表現されていますか。光は、どこから当たっていますか。じっくり見てみましょう。



《スペイン風景》1919-23年頃、コンテ・紙、49.2×69.0cm

のように、スペインの絵画や十八世紀以前の絵画を研究するケースです。日本印象派などのフランス美術を学ぶことが多く、須田

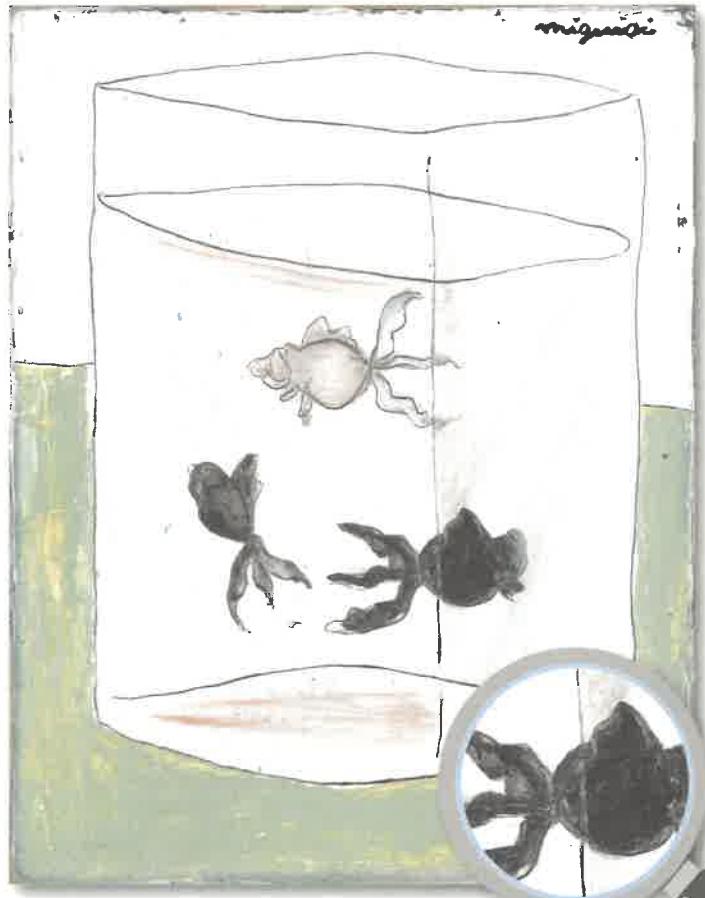
須田国太郎は、一八九一年京都府に生まれました。高校時代から油絵を始め、大学で美術史を研究するようになりますが、本格的に絵画を学ぶようになりますが、外国で勉強することを決心し、一九一九年から四年間スペインで暮らしました。スペインでは、美術館での模写や風景写生にはげみ、写生旅行もたくさん経験しました。帰国後は、美術史の教師をしながら制作を続け、四十一歳で初めて個展を開きました。その後、独立美術協会という美術団体で定期的に作品発表したほか、個展も積極的に開催し、画家として評価を固めました。

作家について

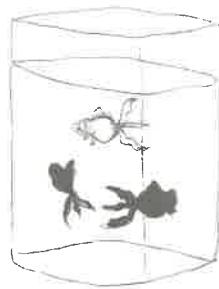
金魚鉢や金魚のりんかく線(黒い線)は、
少し変わった描かれ方をしています。

なにを使って、どうやって
描いたのでしょうか。

線を観察して、想像してみましょう。



三岸好太郎《金魚》



この金魚鉢は、どんな場所に置かれているのかな？

想像して、まわりの様子を描いてみましょう。



みざしこうたろう
三岸好太郎
《金魚》

1933(昭和8)年
油彩・画布
41.2 × 32.0cm

ポイント

「常に新しい表現を追い求めて」

一番はじめにいろいろな色のクレヨンをぬり、その上に黒いクレヨンをぬり重ね、そこをつまようじでひっかいて絵を描く遊びをみなさんは知っているでしょうか？ 作者は、子どもたちと遊んでいるときに見つけたその方法を使って、この作品を描きました。頭のかたすみではいつも絵を描くことを考えていたのでしょうか。そう考えてみれば、身近にあった金魚鉢を題材にしたのもわかります。常に新しい表現を追い求めていた三岸好太郎は、いろいろなもの魅力を見つけることが得意で、それに熱中した人でした。



《金魚鉢》1933年頃
北海道立三岸好太郎美術館蔵



作品について

黄緑色の台の上に、透明な金魚鉢が置かれ、そのなかで3匹の黒い出自金魚がゆらゆらと泳いでいる様子が描かれています。金魚鉢のふちや金魚のりんかく線などが、たよりなくふらふらしていますが、この作品からただよう、ゆつたりとした自由な雰囲気は、このりんかく線の効果と言っていいでしょう。また、金魚をよく見てみると、先に黒やグレーの絵の具で金魚のかたちがぬられ、その上から線を描いていることが分かります。そして、その線は描かれたものではなく、ひっかいてできたものであることに気づきます。画面に絵の具を厚くぬり、乾かないうちに、例えば筆の穂先ではない方などでひっかいて、線を浮き上がらせているのです。作者は、線は引いて描くもの、という常識をくつがえし、ひっかいて浮かび上がらせました。

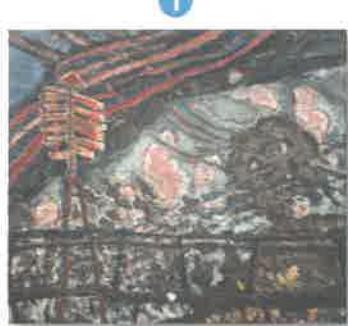


作家について

三岸好太郎は、1903年に北海道に生まれました。1922年に東京に出てくると、作者はセザンヌ、ゴッホといった、20世紀はじめ頃のヨーロッパの絵画に出会い、衝撃を受けました。1923年、新しい表現を探求する画家たちが集った春陽展で《檸檬持てる少女》が入選、翌年《友人ノ肖像》、《兄及び彼ノ長女》などが春陽展で1番になるなど、若い頃から才能に溢っていました。生涯にわたり、いろいろな描き方を試み、作風はいつも変化しました。絵画のほかに詩も作り、ロマンティックな人でした。



あさ い かん え もん でんせんふうけい
朝井閑右衛門《電線風景》



てんじ
展示されている
「電線風景」を
よく見て考えよう。

いま見ている
「電線風景」は、
どれだろう？

いま展示されている
「電線風景」に
○をつけよう。

メモ

電線と電線の
あいだから、何が
見えますか？

電線以外に、
何が描かれていますか？

くわしく知りたい!

朝井閑右衛門《電線風景》について。

鑑賞のポイント



画面には、何本もの電線が描かれています。電線と電線のあいだから見える風景や、電線のまわりの風景にも、注目してみましょう。

作品について

作者・朝井閑右衛門は「電線風景」の制作当時、横須賀市田浦に住んでいました。JRと京急、

この二つの鉄道の交差する場所が「電線風景」という作品のアイディアのもとになっています。

朝井閑右衛門は、この「電線風景」を繰り返し描きました。横須賀美術館には、全部で14点の「電線風景」が所蔵されています。油彩画8点のほか、紙に鉛筆や水彩を使って描かれた「電線風景」が6点あります。制作年がはっきりしない「電線風景」もありますが、ほとん



《電線風景》1950年頃、鉛筆・紙、19.0×55.0cm

どが1950~60年頃に描かれたものです。

それぞれの「電線風景」は同じではなく、少しずつ違います。電線のようす、周りの風景、それに、全体の色の感じや塗り方などを見くらべてみましょう。

朝井閑右衛門は、一九〇一年大阪府に生まれました。一九一九年に東京に来て、本郷洋画研究所で油絵の勉強をしました。二十五歳のとき、二科展といふ展覧会に初入選。三十五歳のときには、文展という大きな展覧会で最高賞の文部大臣賞を受賞し、注目を集めました。

一九三八～四五、繰り返し中国に行つて制作をしていました。一九四七年からは、横須賀市田浦に住みました。なかでも、自宅近くの田浦の景色は「電線風景」というテーマで何度も描かれています。一九六六年に鎌倉に住まいを移し、一九八三年に亡くなるまで鎌倉で暮らしました。

同じテーマを繰り返し描くスタイルは、横須賀にいた頃から変わりませんでした。しかし、鎌倉では、風景よりも物語の絵や静物画、肖像画などを描くことが多かつたようです。

作家について

表面掲載作品 [①～⑧すべて横須賀美術館蔵。]

- ①《電線風景(トンネル)》1952年頃、油彩・画布、45.8×53.1cm
- ②《電線風景1》1952年、油彩・画布、45.0×52.4cm
- ③《電線風景》制作年不詳、油彩・画布、46.0×53.0cm
- ④《電線風景3》1950年、油彩・画布、38.0×45.5cm

- ⑤《電線風景4》1951年頃、油彩・画布、31.8×40.8cm
- ⑥《電線風景》1951年頃、油彩・画布、31.5×40.5cm
- ⑦《電線風景6》1950-60年、油彩・画布、31.8×41.0cm
- ⑧《電線風景》1950年、油彩・画布、45.4×53.4cm

あさ い かん え もん ば ら か せいせい か から こ もんちゅう こ ぜつ ぴつ
朝井 閑右衛門《薔薇(嘉靖青花唐子紋中壺)》〈絶筆〉



がめん 画面を少しあなよこ 横から
みてみてください。
ひょうめん 表面はどのように
なっていますか？

はな えが かた くふう
花の描き方で工夫しているのは、どんなところだろう?
はな は いろ み
花びら、葉っぱ、色などをよく見てみよう。

はな
花びらは?

は
葉っぱは?

いろ
色は?

き た
その他
気づいたこと

さくしや いちばん
えが 作者が一番
描きたかったのは、
はな 花のどんな
ところだろう?

朝井閑右衛門《薔薇(嘉靖青花唐子紋中壺)》〈絶筆〉について。

くわしく知りたい!



朝井閑右衛門
《薔薇(嘉靖青花唐子紋中壺)》〈絶筆〉
1983年、油彩・画布、45.5×53.5cm

鑑賞のポイント／



「絵の表面を見てみよう」

朝井閑右衛門は、絵の具をたっぷりと画面に塗って描いたので、表面はデコボコしていて、近くで見ていたら何が描かれているのかよくわかりません。でも、花びらの色や花の柔らかさ、壺の模様などが上手にとらえられているので、遠くから離れてみると、ピンクや赤い花が壺にいけられている様子を描いたのだとわかります。ほかの作品でも、近づいて見ることによって、使われている材料や筆の動かし方などがわかります。この、作品の表面のことを「絵肌(マチエール)」と呼びます。

反対に、遠くから見ることによって、絵の全体を見ることができ、何が描かれているかわかることもあります。作品を見るとときには、色々な位置や角度から見ることで発見があるかもしれません。

作品について

この作品では、ピンクや赤のバラの花が嘉靖青花唐子紋中壺という壺にいけられている様子が描かれています。壺の名前は長くて難しいですが、中国の嘉靖時代に作られた、白い下地に青色で、唐子(中国の子ども)を描いた、中ぐらいの大きさの壺という意味です。この作品は、朝井閑右衛門が82歳の頃に、鎌倉にあったアトリエ(絵を描くための場所)で描いた作品です。アトリエには、壺や皿、人形など作者が気に入ったものがたくさんありました。朝井閑右衛門はこうして身の回りにあったお気に入りのものを、作品

題材にすることがよくありました。また、朝井閑右衛門はこの作品が描かれた年に亡くなってしまったので、この作品は亡くなる直前まで描いていた最後の作品になります。



《赤絵壺と人形》不詳
横須賀美術館蔵



《夏画室》不詳
横須賀美術館蔵

朝井閑右衛門は一九〇一年大阪府に生まれました。一九一九年に東京に来て、油絵の研究所で絵の勉強をしました。二十五歳という若さで二科展という展覧会で文部大臣賞という大きな賞をめました。上海や中国などに初入選、三十五歳のときには文展という展覧会で文部大臣賞という大きな賞をとつたので人々の注目を集めました。上海や中国などを絵で描いていました。一九四七年からは横須賀市に田舎に引っ越して、田舎で田舎の近くの風景を物語に登場させました。上海や中国などを描いていました。田舎に住み、壺やバラ、家にひとりで住み、壺やバラ、家に近づいて描き続けました。主婦などを、くり返してしまった。一九八三年、八十二歳のとき鎌倉市で亡くなりました。

み さくひん
きょう見た作品のなかで、
こころ のこ さくひん
いちばん心に残った作品は、どれ?
スケッチしておこう。

うらめん さくひん きろく か
※裏面に作品の記録を書くところがあります。



きょう見た作品のなかで、
いちばん心に残った作品について。

作品や作者を知るためのヒントを集めてみよう！

鑑賞のポイント



キャプションを、
よく見てみよう。

例

朝井閑右衛門 (1901-1983)

電線風景

1951(昭和26)年

油彩・画布

ASA I Kan'emon
Landscape with Power Lines
1951 Oil on canvas

作者名(生没年)

題名

制作年

技法・素材

作者名が読みにくい
場合は、ローマ字
表記をチェック！

スケッチした作品の記録を残しておこう。

題名

作者名

制作年

色や形で目立つところ

描き方や材料の特徴

自分が感じた作品の魅力を
ともだちに伝えよう。

たに うち ろく ろう しゅうかんしんちょう ひょうし え
谷内六郎《週刊新潮 表紙絵》

てん じ しつ なか
この展示室の中から、あなたがいちばん気に入った作品を
ひとつ選んで、下の枠に描いてみましょう。

作品名

どうして作者の谷内六郎はこのタイトルを
つけたのだと思いますか？

さくひんとも しょうかい
この作品を友だちに紹介するとなったら、
ちゅうもく み
どんなところに注目して見てもらいたいですか？



たに うち ろく ろう し
みんなは谷内 六郎さんを知っていますか？

たに うち ろく ろう しゅう かんしん ちょう ざつし ひょうし
谷内六郎は、『週刊新潮』という雑誌の表紙を
1956(昭和31)年から26年間描いた人です。
ひょうし え げん が ねん かん えが ひと
表紙絵の原画は1,300点以上もあります。
えが かた くふう けい けん
描き方に工夫がされていたり、みんなも経験
したことのある日常のことが描かれたり、
さく ひん
いろいろな作品があります。

ひょうし え そう かんご
表紙絵創刊号

かずさ さち かしゃ かつ ひ み たか うみ
《上総の町は貨車の列 火の見の高さに海がある》
なん すいさい かみ こにす か ひじゅつかん たにうちろくろうかんぞう
1956年、水彩・紙、34.3×24.5cm、横須賀美術館・谷内六郎館蔵
©Michiko Taniuchi

し
くわしく知りたい!

たにうちろくろう しゅうかんしんちょう ひょうしえ 谷内六郎《週刊新潮 表紙絵》について。



かんしょう 鑑賞のポイント/



さくひん
作品はどうやって描かれているかな?
さくひん
作品をよく見て、いろいろな工夫をみつけてみよう。

たにうちろくろう

ほうほう げんが えが

しょうかい

谷内六郎はいろいろな方法で原画を描いています。ここではそのいくつかを紹介します。



いわ
色にも注目!



何か貼りつけられているよ!



ひび割れている!?

テクニックに注目!

すいさい とうめい すいさい ふとめい すいさい ひょうしえ ふとめい
水彩には透明水彩と不透明水彩があり、表紙絵のほとんどは、不透明
すいさい とうめい すいさい えい えい みずと かみ
水彩で描かれています。透明水彩は絵具をたくさんの水で溶き、紙の地
いろ いた いろ うすく みず から ふうあ
の色の上に塗られた色を生かして薄く塗るため、その軽やかな風合いが
とくちうふ とうめい すいさい すく みず もち えのぐ しろ えのぐ ま
特徴です。不透明水彩は少なめの水を用い、絵具に白の絵具を混ぜるな
どして、下の絵具を隠して色を重ねていくので、透明水彩よりも色がはっ
きりと出るのが特徴です。

《ひま》1967年、水彩・紙、39.3×28.5cm、横須賀美術館・谷内六郎館蔵 ©Michiko Taniuchi

たにうちろくろう さくひん
谷内六郎の作品には、実物の網やレース、砂利などを使った作品があります。谷内は素材を直接画面に貼り付けたり、絵具と混ぜたりして、作品に合わせて色々な表現を試しました。

はつきり ねん すいさい かみ よこすか びじゅつかん たにうちろくろう
《初雪のレース》1978年、水彩、コラージュ・紙、40.5×30.2cm、横須賀美術館・谷内六郎館蔵
©Michiko Taniuchi

テクニックに注目!

たにうちろくろう さくひん
谷内六郎の作品には、実物の網やレース、砂利などを使った作品があります。谷内は素材を直接画面に貼り付けたり、絵具と混ぜたりして、作品に合わせて色々な表現を試しました。

はつきり ねん すいさい かみ よこすか びじゅつかん たにうちろくろう
《初雪のレース》1978年、水彩、コラージュ・紙、40.5×30.2cm、横須賀美術館・谷内六郎館蔵
©Michiko Taniuchi

テクニックに注目!

このひび割れ模様は、ろうけつ染めという技法によってできたものです。ろうけつ染めは、溶かしたろうで模様を布地に描き、布を染めた後にろうを取り除く技法です。ろうのひびの間に染料が入るため、独特のひび割れ模様ができるのです。谷内六郎は兄の四郎を中心とした染色工房「らくだ工房」で、兄弟と一緒に布製品を制作しながら技法を身につけました。

そしゅん ねん ぞしゃくしょく ぬの よこすか びじゅつかん たにうちろくろう
《早春》1959年、ろうけつ染め、着色・布、32.9×23.8cm 横須賀美術館・谷内六郎館蔵
©Michiko Taniuchi

作家について

谷内六郎は、一九二一年東京恵比寿に九人兄弟の六男として生まれました。小学校を卒業した後、漫畫や挿絵などを新聞や雑誌に投稿し、雑誌『キング』や『少年俱樂部』に度々入選します。一九四六年からは兄が経営する染色工房「らくだ工房」でろうけつ染めのハンカチや帯などの布製品を制作しました。一九五六年には雑誌『週刊新潮』の創刊と同時に表紙絵を担当することになります。一九七一年に横須賀市の観音崎灯台で一日灯台長をつとめ、一九七五年には横須賀にアトリエを構えました。谷内は広島の呉市広中中央学校養護学校級や静岡県の「ねむの木学園」と交流し、福祉活動にも力を注ぎます。一九八一年に急性心不全のため亡くなりますが、その時点で『週刊新潮』表紙絵は二三〇三枚になっていました。その後まだ発表されていなかつた作品などでこの年の最終号まで表紙を飾ったため、合計一三三枚となりました。一九九八年に『週刊新潮』表紙絵をはじめとした作品が横須賀市へ寄贈され、二〇〇七年に横須賀美術館敷地内に谷内六郎館が開館しました。